

2017年10月2日

第3242号

週刊(毎週月曜日発行)
購読料1部100円(税込)1年5000円(送料、税込)
発行=株式会社医学書院
〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23
TEL (03) 3817-5694 FAX (03) 3815-7850
E-mail: shinbun@igaku-shoin.co.jp
JCOPY 出版者著作権管理機構 委託出版物

New Medical World Weekly

週刊医学界新聞



医学書院

www.igaku-shoin.co.jp

今週の主な内容

日野原重明先生追悼特集

- [寄稿] 日野原先生と私 (福井次矢, 川嶋みどり, 南裕子, 青木真, 黒川清, L. ティアニー, 岩井郁子, 松村真司, 水野篤, 岸野めぐみ)…… 1—4 面
- 日野原先生と「週刊医学界新聞」…… 5 面
- MEDICAL LIBRARY (追悼特別編集) …… 6—7 面



追悼特集

日野原先生と私

本紙 3000号 (2012年10月29日付) インタビューにて

米国式のベッドサイド教育を日本に導入した第一人者、「生活習慣病」の提唱で知られる予防医学の推進者、「プライマリ・ケア」「POS」「ターミナルケア」などの概念を広めたオピニオンリーダー、看護教育に尽力した医師、地下鉄サリン事件で陣頭指揮を執った病院長……。

本号は、2017年7月18日に105歳で永眠された日野原重明先生の追悼特集です。しかしながら、これらの偉大なる業績を限られた紙面の中で語り尽くすことはできそうもありません。今回は「日野原先生と私」という個別の関係性の中から、先生の医学界への貢献、人への愛と慈しみの軌跡を、ここに残したいと思います。

ひのはら・しげあき氏 ● 1911年10月4日生まれ。37年京都帝国大医学部卒。41年聖路加国際病院に内科医として赴任。51年米国エモリー大留学。74～98年聖路加看護大(現・聖路加国際大)学長、92～96年聖路加国際病院院長を務めた後、聖路加国際病院名誉院長、聖路加国際大名譽学長、学校法人聖路加国際大名譽理事長。2005年文化勲章受章。



忘れ得ぬ言葉

福井 次矢

聖路加国際大学学長/聖路加国際病院院長

過去41年間にわたり日野原先生のお教えを受け、覚悟はしていたものの、いざ亡くなると、何か背筋に不安・寂しさを覚える日々である。「身長が伸びるような学び」

日野原先生は終戦後の1951年(40歳時)、米国エモリー大に1年間留学された。そのときに学んだ多くの事柄が、以後の先生の膨大な業績の礎となった。そのときの経験を「毎日毎日学ぶことが多く、身長が伸びるようだった」と話されるのを、私は1976年、研修医になりたてのころお聞きし、どういわけか強く印象に残った。

その後、私自身、1980年代に先生のご配慮で米国の病院・大学に留学し、まさに先生がおっしゃっていた通りの経験をした。そしてその折に学んだ事柄が、私のキャリアを形作り、帰国後も先生とご一緒に、いくつもの新たな分野を開拓する仕事に携わること

ができたのは本当に幸運であった。

「自宅は何階にありますか？」

1970年代後半、聖路加国際病院で毎週火曜日朝8時から行われていた教育回診でのエピソード。心不全の患者さんが翌日退院予定だとの研修医のプレゼンテーションに対し、日野原先生は「患者さんの自宅は何階にありますか？」と尋ねられた。その患者さんはエレベーターのないビルディングの3階に住んでいて、果たして3階までの階段を上り下りするだけの心機能が回復していることを確かめたかどうか、われわれ研修医は鋭く追及された。

当時、患者さんの生活背景や習慣にそれほどきめ細かく配慮する必要性を主張する医師はほとんどいなかった。そのような視点を有する日野原先生にとって、「成人病」と呼ばれていた脳や心臓の血管疾患、糖尿病、肥満、高血圧などを「生活習慣病」と命名する



● 2006年7月、シュヴァイツァー病院訪問時、アフリカ・ガボンにて

ことは当然であった。疫病のごとく広がりがつあったこれらの病気のかなりの部分は、一人ひとりが日常の生活習慣を変えることによって予防ないし治療できることを見事に言い表し、人口に膾炙させ、国を挙げての予防と治療につなげた功績は誠に大である。

「年を取ることは未知の世界、楽しい冒険」

最近数年間は、加齢に伴うさまざまな臓器の機能低下と医学生時代にかかった肺結核の後遺症を背景に、先生は短期入院を繰り返された。本年3月の最後の入院時には嚥下機能が著しく低下して、ご家族立ち会いの下、私

から「管を介する水分・栄養分の補給を望めますか?」「ご自宅での療養を望めますか?」と尋ねた。先生は明確に、経管栄養を拒否され、自宅療養を望まれた。そして、その後約4か月間、ご自宅で死に至る静かな時間を過ごされた。好奇心旺盛な先生は、60歳代の頃から「年を取ることは未知の世界であり、こんな楽しい冒険はない」ともおっしゃっていて、ご自分の死に至るプロセスさえ客観的に観察されていたように思う。

(2面につづく)

10 October 2017

新刊のご案内

医学書院

● 本紙で紹介の和書のご注文・お問い合わせは、お近くの医書専門店または医学書院販売部へ ☎03-3817-5650
● 医学書院ホームページ (http://www.igaku-shoin.co.jp) もご覧ください。

あなたの患者さん、認知症かもしれません
急性期・一般病院におけるアセスメントからBPSD・せん妄の予防、意思決定・退院支援まで
小川朝生
A5 頁192 3,500円 [ISBN978-4-260-02852-3]

臨床検査データブック【コンパクト版】(第9版)
監修 高久史磨
編集 黒川 清、春日雅人、北村 聖
三五変型 頁406 1,800円 [ISBN978-4-260-03435-7]

誰も教えてくれなかった胸部画像の見かた・考えかた
小林弘明
B5 頁266 5,000円 [ISBN978-4-260-03008-3]

腹部血管画像解剖アトラス
衣袋健司
B5 頁160 10,000円 [ISBN978-4-260-03057-1]

〈ジェネラリストBOOKS〉認知症はこう診る
初回面接・診断からBPSDの対応まで
編集 上田 諭
A5 頁264 3,800円 [ISBN978-4-260-03221-6]

循環器Physical Examination【動画・心音186点付】
診断力に差がつく身体診察!
山崎直仁
B5 頁188 5,000円 [ISBN978-4-260-03235-3]

〈Navigate〉消化器疾患
石橋賢一
B5 頁458 4,200円 [ISBN978-4-260-03260-5]

脳腫瘍臨床病理カラーアトラス(第4版)
編集 日本脳腫瘍病理学会
編集委員 若林俊彦、洗井壮一郎、廣瀬隆則、小森隆司
A4 頁232 19,000円 [ISBN978-4-260-03047-2]

高次脳機能がよくわかる脳のしくみとそのみかた
植村研一
A5 頁136 2,800円 [ISBN978-4-260-03195-0]

眼瞼・結膜腫瘍アトラス
後藤 浩
A4 頁176 12,000円 [ISBN978-4-260-03222-3]

神経眼科学を学ぶ人のために(第2版)
三村 治
B5 頁344 9,200円 [ISBN978-4-260-03218-6]

誤嚥性肺炎の予防とケア7つの多面的アプローチをはじめよう
前田圭介
B5 頁144 2,400円 [ISBN978-4-260-03232-2]

看護におけるクリティカルシンキング教育
良質の看護実践を生み出す力
楠見 孝、津波古澄子
B5 頁162 2,500円 [ISBN978-4-260-03210-0]



先生の寄せた看護への期待を胸に

川嶋 みどり

日本赤十字看護大学名誉教授/健和会臨床看護学研究所長

日野原先生との最初の出会いは、戦後のGHQによる諸改革の流れのもと、新たな看護教育制度のモデル校として、日本赤十字女子専門学校と聖路加女子専門学校との共同教育(1946~1953年)がようやく軌道に乗ったころでした。聖路加国際病院の内科医長であった先生は、1年次の解剖生理学120時間、薬理学48時間を担当されていました。教科書も参考書もなく、耳慣れない専門用語を聞き漏らすまいと、ただただ講義と板書を照らしながらノートに書き写したのですが、上級生から「名講義」と申し送られた通り、先生の授業はいつまでも記憶に残るものでした。こうして、私が看護の世界に足を踏み入れたその時から60年以上もの長きにわたって、幾度となく先生と直接お話する機会を、『看護学雑誌』や『週刊医学界新聞』紙上の座談会・対談(写真)などで与えられたことはとても幸運でした。

この夏、青山葬儀所での先生のご葬儀に参列し、蝉時雨を浴びながら正面祭壇の先生の穏やかな笑顔に触れ、毎年、この季節になると「そろそろ研究会の準備を」との電話をいただいたことを思い出しました。研究会とは、昨年まで17年間続いた腹臥位療法推進研究会です。「腹臥位療法は極めて論理的でしかも庶民的な健康法」として、「うつぶせ寝を21世紀の国民運動にしよう」と、その企画から運営までをご一緒させていただきましたが、毎回その効果をご自身の体験や患者さんへのアプローチの結果を交えて話されたの



●『週刊医学界新聞』創刊2500号記念対談にて

で、一般の参加者も満足されておりました。ただ、普及のテンポが遅く、看護師が本気になって実践したらもっと広がるはずともおっしゃっていました。それにつけても、先生の数多くの業績の中で、時々の看護師の意識や実践に与えられた影響は言葉では語り尽くせません。とりわけ、あの東日本大震災の直後に発信されたメッセージの底に流れる、先生の愛に満ちた看護への期待を裏切らぬよう、実践しなければならぬと思います。先生は、病を治すことだけを第一義に置く医療だけでは、人々の豊かな生を全うし難いこと、そこで、誰にでも約束されるべき「日常」という営みが将来にわたって守られるためにも、看護師が主体的にケアをすべきであり、「これからの看護は、医療をも包含する、ケアという大きな傘のもとで、ケア全体をその最前線で牽引していくことが求められている」と述べられました。この大きな課題の重みを強く受け止め、その実現に向かって全ての看護師が行動することこそ、先生の御霊を安んじることにつながると思います。



「夢追い人たれ」のお言葉とともに

南 裕子

高知県立大学特任教授/兵庫県立大学名誉教授

日野原先生は多くの分野において多大なご功績のある方だが、看護学発展においてもしかりである。僭越ながら私とのかかわりを紹介させていただきたい。

40年近く前、サンフランシスコのユニオン広場を見下ろすエレガントなホテルのレストランでランチをいただきながら、先生の壮大で多方面にわたる夢を語っていただいたことから始まる。お話の終わりごろに、「博士課程を終えたら聖路加看護大で働かないか」とお誘いがあった。そして約10年間、日野原学長の下で、日本初の看護学博士課程の開設、WHO協力センターの誘致(写真)、精神看護学の学部・大学院の開設などにかかわった。博士後期課程開設の折には、躊躇する教員に向けては「私がまだ生きている間に作らなくてははいけないよ」(先生はあれから30年は生きられた!)と激励され、文部省の若い役人の前では丁寧なお辞儀や対応の仕方を示してくださった。医学の権威であられた学長が看護学博士後期課程の教育内容には一言も注文を付けなかったことにあらためて気が付いた。看護学の専門性を重んじてくださったエピソードは枚挙にいとまがない。

兵庫県から「大学を作るので来てほしい」と請われて、先生に相談した。先生からは、「学長はまず夢を持つこと、それはすぐには理解されないかもしれないが、言い続けること」というはなむけのお言葉をいただいた。阪神・淡路大震災が発生して間もない頃、私は看護学の研究所を作りたいという夢を持って先生に相談した。先生はその夢を理解して下さって、寄付



●1990年、聖路加看護大が看護分野で初めてのWHO協力センターとなる(左端が日野原氏)

金集めの委員会の委員長を務めてくださり、研究所内に必要であった設備を買うことができるようになった。

ある時、日本看護協会出版会の社長就任をお願いする役を持ってお尋ねした。「私は給料は要らないけど、引き受けたら口は出すよ」と言われ、名誉職に近いイメージでお願いに伺った私たちは恥ずかしくて大汗をかいたものである。そして先生は見事に社長として出版会を発展させてくださった。

40年近いお付き合いのなかで、お会いするたび先生は新しい夢とそれを実現するための手だてを語って聞かせてくださった。多くのご著書のあるなかで、私が先生の息遣いを一番感じるの『十代のきみたちへ——ぜひ読んでほしい憲法の本』(富山房インターナショナル)である。感動した私が差し上げたお手紙へのお返事には「あなたは心の同志」というお言葉があり、30歳若い私は「夢追い人たれ」と併せて「いのちと平和への掛けぬ心のありよう」の教えとともに生きる覚悟をいただいた。

日野原先生に深い感謝を捧げます。



ベッドサイドに捧げられた生涯

青木 眞

感染症コンサルタント

日本の感染症の世界が微生物に偏りすぎて、臨床感染症学という専門領域が欠如していることを極めて早い時期から憂慮されていた日野原先生は、筆者が渡米する前から自宅にお招きくださり激励して下さった。日野原先生なくして筆者の帰国も聖路加国際病院を起点とする教育活動もあり得なかった。そしてその大恩に報いどころか落胆させることさえ多かつた筆者を、それでも赦し忍耐をもって接して下さった日野原先生の思い出を僭越ながら書かせていただく。

大所高所から日本の社会、医療界を見渡し、大きな枠組みから発言し、学会や行政、その他に影響を与える著名

な医師は、それなりにおられると思う。そして日野原先生も間違いなく、そのお一人であった。

しかし日野原先生のユニークさは、その活動規模の大きさにもかかわらずベッドサイドの人であり続けたことだと感じている。一般的に医師は、その役割・任務が大きくなるほど、現場から遠ざかり、自然、泥臭いベッドサイドの匂いが薄らいでいく。日野原先生にはそれがなかった。正確にはお出来にならなかった。身体をこごめるようにして、それでも臨床医の当然の仕事であるかのように最後まで回診をなさる日野原先生。彼の周囲にはそのオーラに包まれていた多くの若手医師・

医療従事者の姿が常にあった。

ベッドサイドの医師は本能的に同類を嗅ぎ分ける。その代表者でいらっしゃった日野原先生はL. ティアニー先生を米国から探し出し日本に紹介して下さった。ティアニー先生の「ベッドサイド」ティーチングは今日も日本全国で続いている。この一例だけでも日本の臨床現場に与えた功績は計り知れない。渦中の新専門医制度の問題の本質が「ベッドサイド」の欠如にあることを思うとき、卒後臨床研修や内科専門医制度の立ち上げに尽力なさった日野原先生に、もっと活躍していただきたいかと思うのは筆者だけではないだろう。

権力に媚びず、ひたすらその生涯をベッドサイドに捧げられた、日野原先生の視線は医師以外の、看護師を含む他の医療従事者にも平らに行き渡り、Nurse Practitioner といった職能の紹



●「先生からいただいた手紙が、帰国を諦めていた私に、日本の感染症を、より臨床的にする機会を与えてくださいました」(青木氏)

介・導入にもつながった。その温もりは現代医療から見放されやすい末期がん患者にまで及んだ。ホスピスで演奏されるのだろうか、旋律が讃美歌にも似る、日野原先生ご自身が作られた曲。その楽譜を同乗させていただいた車の中で楽しそうに披露して下さった先輩キリスト者でもある日野原先生の温もりに、短い時間ながら不肖の弟子として触れる機会が与えられた、その僥倖を思う。

我らに診断できぬものなし!

魁!! 診断塾 東京GIMカンファレンス激闘編

東京GIMカンファレンスで実際に提示された症例を題材に、某名作漫画を愛する5人の医師が繰り広げる熱いclinical problem solving! 『medicina』誌で好評を博した異色連載を書籍化。

- 佐田電一 龍田総合病院 総合内科・内科共同プログラム
- 綿貫 聡 東京都立多摩総合医療センター 救急・総合診療センター
- 志水太郎 獨協医科大学 総合診療科・総合診療教育センター
- 石金正裕 国立国際医療研究センター 国際感染症センター・AMP臨床リファレンスセンター
- 忽那賢志 国立国際医療研究センター 国際感染症センター

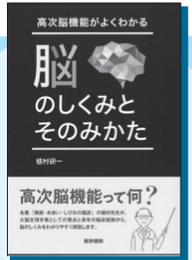


複雑な脳の機能を、大脳生理学者の視点と長年の臨床経験からわかりやすく解説

高次脳機能がよくわかる 脳のしくみとそのみかた

複雑な脳の機能をのしくみを図を多用してテンポよく解説する。高次脳機能障害の患者さんに会ったときに、なんでこうなるの? がよくわかる。麻痺や失語などのリハビリテーションへの、脳機能からのアプローチに役立つ1冊。名著『頭痛・めまい・しびれの臨床』の著者が、大脳生理学者の視点と長年の臨床経験から、脳のしくみをわかりやすく解説する。

植村研一 浜松医科大学名誉教授





世界の医学の潮流を感じ続けた教育者

黒川 清

東京大学名誉教授/政策研究大学院大学名誉教授/
日本医療政策機構代表理事

私の在米生活が10年ほどたった1970年の終わりごろから、学会などに招かれ日本を訪ねる機会があるようになった。米国の大学で内科のキャリアで活動していた私にも日本の友人たちが少しは注目し始めたのかもしれない。また、日本から米国の学会での研究発表が増え始め、会場でも旧友によく出会うようになっていた。

思いもかけないいきさつで、その数年後に私は帰国することになった。日米の医学教育の改革などについて、日野原先生と意見を交わす機会を持つことができた。いまから30余年も前の話である。先生は、「黒川さん、私の車で次の場所まで送らせるから、遠慮しないで」と言うので、先生のお車を使わせていただいたことが何度もある。

大きなゆったりした車の先生の座席の前には、椅子の背もたれに付いた小さなテーブルがあり、ものが書けるようになっていて。横の席にはいくつもの本が置いてある。これらの本を手にとってページをパラパラとめくってみると、先生は確かに読んでおられるのだ。これには驚き、敬服した。

あれだけ何冊もの本を著わし、毎年

年末年始にはボストンなどを訪問して、米国の医療・医学教育の報告を『週刊医学界新聞』などに書いておられた。頭が下がる思いで何回か先生のところを訪ねた。

80歳を超えてもお元気、90歳を超えてもお元気。先生は米国の医学教育や診療現場での変化についての私の問い掛けに答える十分な知識を持っておられた。私の周りには大学関係者も多いのだが、世界の医学教育・研修の変化の潮流を知らない方たちも多く、何かあるたびに、「いつも先生のようなご長老に意見を伺うなんて、ちょっと変ですよ」とお話ししたものだ。

その私も、いつの間にか当時の日野原先生に近い年齢になっている。私には出る幕などないような時代にならなければいけないのだが、世界の潮流を身をもって体験し、実感を持って感じ取れる医学周辺の教育者があまりにも少ないのが気になる。

グローバル時代のさなか、新興アジア諸国が台頭する中で、日本の大学の存在が徐々に薄れているのが私の大きな懸念だ。医学部も例外ではない。以前からのことなのだが、特に医学教育は、かなり遅れている。



愛すること、創めること、そして耐えること

岩井 郁子

聖路加国際大学名誉教授

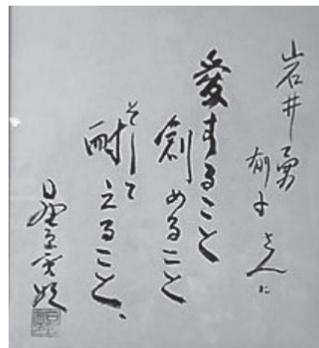
色紙(写真)の言葉は、私の中に生き続ける日野原先生の存在そのものであり、生き方のモデルでもあります。6月まで届いた「書斎から」のメールが今も届きそうです。

出会いから半世紀。私の歩みは先生に学び、導かれ、支えられ、活かされ、臨床や教育の中で「創(はじ)めること」にチャレンジできたのです。先生との出会いがなければ、私は異なった人生を歩んでいたと思います。

日野原先生の下、聖路加国際病院の内科病棟でヘッドナースとして勤務した私は、チーム医療実践の中で、看護の喜び・楽しさを深めました。1971年に聖路加看護大の教員になってからも、病棟で学生やスタッフと共にケアを行う中で教育ができたのも聖ルカの文化でした。

1972年、米国から帰国直後の日野原先生は、POS(Problem Oriented System; 問題志向システム)を熱く説き、入院中だった橋本寛敏学長(当時)の記録を「明日から問題志向型記録で書く」と指示しました。私の記録も「とても良いよ」と褒めていただき、このときから私もPOSに取り組むことになりました。

1973年、先生はライフ・プランニング・センターを設立し、医学・看護教育の刷新をめざし国際セミナーやワークショップ(WS)を開催しました。1976年、マックマスター大からHoward Barrowsを迎えたWS「模擬患者養成と問題志向型学習・PBLによる教育の刷新」は3泊4日で行われ、参



●日野原氏から贈られた色紙

加者35人には実践成果の発表が課されました。私は、うっ血性心不全で入院退院を繰り返していた日野原先生の担当患者さんを「Written patient(模擬患者)」としてSequence of eventsと共に発表し、その後の教育にも影響を与えたひとつです。この発表会に参加した20人を中心に1979年、POS研究会(現・日本POS医療学会)が発足し、39年間続いた学会は日本の診療記録に大きな変革をもたらした。今年、発展的に解散することになりました。

日野原先生から特に多くを学んだのは、毎週火曜日早朝からの教育回診です。21年間参加し、系統的な考え方や意思決定の在り方なども学びましたが、先生の人間性、医師としてのモラル、瞬時に患者の信頼を得て深くかわる術は何よりも見事でした。視診、聴診、触診はベッドに横座りになり、柔らかく温かな太い指で丁寧に。肝臓の診方は独特で、触診と聴診で濁音界を明らかにし、医師やナースに「やっごらん。聴いてごらん」と教えました。この回診も“全人的ケア”そのものでした。

書き尽くせない思い出がありますが、二人の写真は笑顔通り先生のお人柄を表す一枚です。この時、聖ルカの重要な人事も話し合われていました。先生は常に先見性と革新性をもって教育と実践の中で信念を貫き、先生のお人柄と生き方に魅了された多くの人々を活かし、確実に医学・看護教育と実践を変革・刷新なさったのです。

これには本当に驚かされました。日野原先生は、日本の医療制度改革や医学教育の刷新に多大な貢献をされました。これほど偉大な業績を残した人は、米国にもいません。そして人間としても魅力的でした。謙虚で勤勉で、全ての人に寛容な心で接した。医師としてはもちろん、一人の人間としても、素晴らしい人生(great life)を歩まれました。

(4面につづく)



Great man, Great life.

ローレンス・ティアニー

カリフォルニア大学サンフランシスコ校教授

1991年のある日、私のオフィスの電話がなりました。電話の主は大学の医学部長です。「ちょっと来てくれないかい? 今、日本から友人が来ていて、教育者としてふさわしい総合内科医を日本に招聘したいと言うんだよ」。これが後に私の人生を変えることになる、日野原先生との出会いです。

私は日野原先生を自宅に招いてランチを共にしました。妻が作ったチキンサラダ・サンドイッチを食べながら、日本の内科研修は専門分野に偏っていること、全ての内科医に総合内科の教育が必要であることを彼は語りました。

翌92年、私はサバティカル(研究のための長期休暇)を利用して日本を初めて訪れることになります。聖路加国際病院と国立東京第二病院(現・東京医療センター)をベースに、日本各地の医療機関で指導を行いました。これらは全て、日野原先生のアレンジです。「休みの日に京都に行きたい」と言ったら、車で東京駅まで連れて行ってくれたこともありました。それだけ



●『JIM』誌公開収録シリーズ「ティアニー先生の診断道場」(2012年11月、医学書院)

でなく、駅のホームまでついて来て車両と座席を教えてくれた。既に80歳を過ぎていたはずですが、greatな人です。それ以降、今日に至るまで、私は毎年のように日本を訪れるようになりました。黒川清先生や青木眞先生をはじめとする友人との出会いも、日野原先生によってもたらされました。

日野原先生とのエピソードで覚えているのは、毎週欠かさず行っていた教育回診です。患者さんはまるで礼拝のような面持ちで彼の診察を受け、その



●1992年8月、ボストン郊外のコテージにて

存在そのものに癒されているのが見て取れました。

青木先生と一緒にいった症例検討会(写真)も印象深いです。心臓の聴診に関して「全てのIII音は病的(pathological)である」と私が説明したら、最前列に座っていた日野原先生が「ちょっといいですか」と言って突然立ち上がったのです。そして、既に100歳を超えていたはずですが会場に響きわたる明瞭な声で、例外的に病的ではないIII音があることを解説し始めた。あ

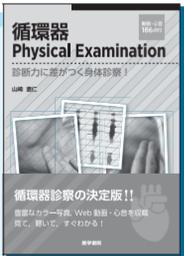
指導医に教わっている感覚で、異常所見を学べる!

循環器Physical Examination [動画・心音186点付]

診断力に差がつく身体診察!

循環器疾患の異常所見を豊富なカラー写真、動画・心音を用いて解説。実際の身体所見・心音を呈示することで、指導医からベッドサイドで循環器診察を教わっている雰囲気再現している。また、心音聴診だけでなく、視診・触診所見までリアルに学べるいままでにない内容となっている。循環器診察のマスターに大いに役立つ1冊。

山崎直仁
高知大学 老年病・循環器内科学



“認知症の時代”の診療スタンダード、待望の改訂!

認知症疾患診療ガイドライン2017

認知症に関する情報を網羅した診療ガイドラインに待望の改訂版。定義や疫学、診断、治療、社会資源などの総論的な内容から、アルツハイマー型認知症やレビー小体型認知症など原因疾患ごとの具体的な特徴や診断・治療法といった各論的な内容まで幅広く網羅。全編クリニカル・クエスチョン形式で、読者の疑問にダイレクトかつわかりやすく答える内容となっている。

監修 日本神経学会
編集 「認知症疾患診療ガイドライン」
作成委員会





プライマリ・ケアの道へと導かれて

松村 真司
松村医院院長

私と日野原先生との最初の接点は、かつて父が診療していた頃の松村医院の書斎にある。『プライマリ・ケアとは何か——医療への新しいアプローチ』と、『プライマリ・ケア医学——包括医療実践のために』（ともに医学書院）。聖路加国際病院でインターンをした父と、同じ病院で看護師として働いていた母が結婚後二人でやっていた小さな町の医院の書斎にその2冊はあった。地方大学で学んでいた私は、この2冊の本によって当時大学では聞くことのなかった「プライマリ・ケア」という言葉を知った。インターネットもない時代、実家に帰省するたび、父の書斎に潜り込んでまるで秘密の書であるかのようにこれらを読み、プライマリ・ケアを学んだ。そして、私がめざす医療はここにある、と確信した。前書の訳者(著者はジョン・フライ)、そして後書の編著者が日野原先生である。そのころの先生は、後にプライマリ・ケアの道へ進むことになる私の前方、遙か彼方にいた。

その後、紆余曲折を経ながらも、総合診療という名のもと辛うじてプライマリ・ケアにかかわっていた私が日野原先生と再会したのは、その小さな診療所を引き継いだ2000年ごろのことであった。プライマリ・ケアを追求し



●1981年に出版された2冊

ていた父が病で倒れ、急遽診療所を継承して必死で診療を続ける私に対し、日野原先生は「外来診療刷新のためのセミナー」や、「聖路加/ハーバードメディカルインターナショナルプライマリ・ケアセミナー」など、これらのプライマリ・ケアをめぐるお仕事に声を掛けてくださった。

「松村先生、君の家は私の家の近くだろう、一緒に乗って行こう」。近所にお住まいということもあって、しばしばこれらの会場への道中を二人で一緒にさせてもらった。すでに『生き方上手』(ユーリーグ)をはじめ一般書でもベストセラーを連発していたころである。「先日渋谷駅を通り掛かったら、先生のお顔をラッピングしたバスが走っていましたよ!」とお伝えしたら、「そう、僕はまだ見ていないんだ、どんな顔だった?」と逆に笑顔で聞かれたのを覚えている。当時車中でお話したことほとんどは、今から思えばたわいない話ばかりだったが、その柔軟な発想や、旺盛な好奇心を前に、まるで年齢も経験も超越した、旧友と話しているような気持ちになったのを覚えている。

まだ日野原先生の生涯の半分にも達していない私に、先生が残した宿題は大きすぎ、私だけで担うことは不可能である。しかし日野原先生のプライマリ・ケアにかける志の一端を引き継ぎ、先生のように、人々に希望を与え、そして明日をつくるこれらの活動に、先生に導かれてプライマリ・ケアに足を踏み入れた一人として、少しでも長くかかわっていきたく思っている。



先生と共に返し続けた「借金リスト」

岸野 めぐみ
元・秘書/清泉女子大学文学部スペイン語・スペイン文学科研究生

私は、日野原先生の聖路加国際病院院長代理時代から100歳になられた年まで、その間私事で数年の休みはあったが、長きにわたり病院と自宅の秘書として仕事をさせていただいた。

院長室から先生のご自宅の書斎に移った当初は、とても優雅な毎日であった。原稿の清書の他、医学書院発行の内科雑誌『medicina』に当時連載されていたウィリアム・オスラーの伝記『The Life of Sir William Osler』(Harvey Cushing)の翻訳とその調べものが中心だった。『medicina』の連載が終わってから先生は、オスラーの言葉を医学の論文の原稿の端々に用いられてい

た。そして毎日のお忙しい診療の合間にオスラーの文献をよく読まれていて、オスラー関係のファイルを先生と一緒に整理したことは忘れられない。『平静の心——オスラー博士講演集』(医学書院)とその脚注を英訳した『Osler's "A Way of Life" & Other Addresses, with Commentary & Annotations』(デューク大出版部)、『医の道を求めて——ウィリアム・オスラー博士の生涯に学ぶ』(医学書院)の一連の出版、日本オスラー協会の発足、米国オスラー協会への参加は、数多くの先生のお仕事の中心であった。

日野原先生は75歳を過ぎたころか



先生の祈りをそばで感じて

水野 篤
聖路加国際病院循環器内科

日野原先生との出会いは聖路加国際病院に入って、忘れもしない新入職員に向けたプレゼンテーションでした。不届きものながら先生を存じ上げずに神戸から上京した「いち田舎者」とっては、「Mayo Clinicみたいな病院を作りたいんだ!」という異常に熱いプレゼンテーションは衝撃でした。10年以上たった今でも、そのときの熱量を感じることができます。

先生は本当に気さくで、突然お邪魔したときでも嫌な顔ひとつせず、いろいろな話を聞かせてくださいました。いくつもの伝説が語られていると思いますが、やはり同じ循環器内科医として、「カリウムを飲んだ」話、「深夜の食道心音図記録」の話は衝撃でした。マッドサイエンティスト(笑)と呼ばれてもおかしくないかと思うぐらい、ただただ医療に真摯に向き合うということを繰り返してこられていたんですよ。回診では患者さんへの優しい気持ちと、科学者の姿勢を持って、誰にも分け隔てなくお話しされている背中に医師としてのあるべき姿を学びました。

山内英子・照夫先生夫妻、秘書の山本恵美子さん、聖路加国際大のチャプレンの皆さんと日野原先生のご自宅へお伺いする中で(写真)、人として生きることの意義、表面のみではない優しさ・祈り、医師としてだけではなく、「ひとりの人」としてそれらにどう向き合うかということ勉強させていただきました。今、いち医師としてScience および Art をもって患者に接することに、臨床医として強いミッション=使命を感じています。

私が聖路加国際病院の紹介をすると



●「日野原先生がいらっしゃらなかったら、今の私たち夫婦は存在していません。今度は先生の思いを私たちが継承していく番です」(山内照夫氏)

き、いつも決まって「あのおじいさん先生のところでしょ?」ということを言われていました。ただ、こういう表現が使われることは、きっとどこかでなくなるんだなあと思ってしまう。日野原先生からの溢れんばかりの昔話、感謝の一言一言、くしゃくしゃにしながら笑った顔。これらの記憶はベッドサイド・ライブラリー(本紙3227号)や、葉っぱのフレディなどのミュージカル、聖路加国際病院での臨床と研究といったものに少しずつこっそり残されていくことかと思えます。日々のふとした瞬間にこれらがふわっと広がるようなカラフルな瞬間を楽しみにしています。

日野原先生は人として本当に素晴らしい生き方をされていたように思います。先生がそのように生きることができたのも、秘書の方々をはじめとした周りの人々や、ご家族の方々の献身的な支えがあったからだと思えます。皆さん、本当にお疲れ様でした。

先生はきっといつも祈ってくださっているように思います。“全ての方々に穏やかな気持ちが与えられますように”と。

らさらにアクセルを踏まれたように、執筆活動に精励された。締め切りを過ぎた原稿を先生は「借金」と言われた。毎週金曜日には10件以上の「借金リスト」を書斎の机の上に置いて帰宅するのが、私のお決まりだった。そして月曜日に、大きく「×」を付けられたリストと週末に書かれた原稿が残されて、私が清書に取り掛かるというシステムであった。

1995年の地下鉄サリン事件の日も同様だった。先生の残された原稿を午前中いっぱい清書し、院長室にFAXを送って昼食にした。奥様とテレビで先生の記者会見を見て、書斎に戻ると、FAXで先生の訂正が加わった原稿がいつも通りに戻ってきており、急いで訂正し、その日締め切りだった原稿を出版社に送って「借金」を返した。また、その夜には、先生から電話で「今、病院からの帰りの車です。



●「先生はよく、医学生への講演で“Not four years, but forty years”とおっしゃっていました」(岸野氏)。生涯学び続けた日野原氏らしい言葉である。

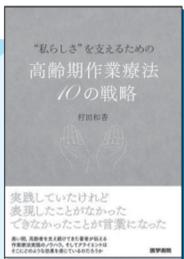
今晩は急ぎの原稿を書かなくてはならないのか」と電話があった。「今晩はどうぞごゆっくりお休みください」と言う余裕もなく、急いで「借金リスト」を先生に申し上げた。日野原先生はオスラーの教え通り、いかなる時も常に心は「平静」であった。

高齢者に対する作業療法の臨床実践について模索している作業療法士のための手引書

“私らしさ”を支えるための 高齢期作業療法 10の戦略

著者のこれまでの経験や研究をもとに、高齢者に対する作業療法の思考プロセス(リーズニング)が、豊富な事例や用語解説を交えながら、わかりやすく解説される。「知っていたけど表現できなかった」作業療法10の戦略と具体的な44の方法がわかる、若手OT必携の1冊。

村田和香
北海道大学大学院保健科学研究科教授・生活機能学分野



免疫不全患者の感染症マネジメントに寄与する決定版テキスト

新刊 **チャンドラセカール 移植・免疫不全者の感染症**
Infections in the Immunosuppressed Patient: An Illustrated Case-Based Approach

▶がん、固形臓器移植、造血幹細胞移植、免疫抑制薬使用などにより免疫不全状態にある患者の感染症診療に関し、81の症例を通して必要不可欠な知識を網羅、解説。各章は症例提示、鑑別診断、治療とその経過、最終診断、ディスカッションなどの順に展開、高度な知識や経験が必要とされる免疫不全患者へのアプローチや思考過程を学ぶことができる。感染症科はもちろん、総合診療科、移植外科、腎臓内科、血液内科など免疫不全患者に関わるすべての医師に幅広く有用。

監訳: 青柳 有紀・兒子 真之

定価: 本体12,000円+税
B5変 頁400 図21・写真218 2017年
ISBN978-4-89592-898-4

TEL: (03)5804-6051 http://www.medsci.co.jp
113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 FAX: (03)5804-6055 Eメール: info@medsci.co.jp



日野原重明先生には、1955年の「週刊医学界新聞」創刊当時より数々の企画にご参画いただきました。1959年には、「ぷろふあいる」という人物紹介欄に初めて写真付きで登場されています。恐らくは編集部執筆と思われるその記事の中で、「むずかしい事柄を実に解り易く表現する文章、それは単に文章技術の問題ではなく、臨床にお

ける氏の実力によるものであろう」(本紙第350号)と評されています。そのコラムの結語では、半世紀後も変わることない先生の姿が描写されます。「臨床と執筆に追われるような日常、タクシーの中でも筆を取る——この逸話は、聖ルカ病院では有名である。しかし日曜日にでも、田園調布にある自宅を訪れると、時たま、ショパンの曲が

静かに流れてくることがある。このピアノ、それが忙しい氏の唯一の趣味」。

日野原先生は年末の休暇を利用するなどして定期的に米国を視察し、病院経営者や医学部教授らとの情報交換を踏まえた医学・看護学・医療事情の最新動向を、短期集中連載として本紙にご寄稿していただきました。この名物企画は1978年に始まり、2007年まで断続的に掲載されました。2007年当時の日野原先生は95歳。5日間の訪米で11人との面談を済ませ、「帰国後に報告する予定の5日間のボストン滞りの印象を、記憶の新しいうちにと書いて走り書きしていたら、午前5時になった。午前6時にはRabkin教授の車でホテルを出て、午前8時発のユナイテッド・エアラインでボストンを発ち、日本には元日の夕刻に成田空港に着いた」と記しています(本紙第2726号)。

座談会・対談・インタビューに限って数えてみると、45回ご登場いただいています。もちろん最多記録です。日野原先生にご参画された座談会・対談を、わずかですが挙げてみます(テーマに続く括弧内は他の出席者、敬称

略)。テーマは近代科学からプライマリ・ケア、ホスピス、臨床疫学、診療録にまで及びます。幅広い知識や進取の精神に改めて驚かされるとともに、医学・医療の革新の軌跡を垣間見る思いです。

- 科学・哲学・医学 (武見太郎)
- 医学の進歩と医療の原点(山村雄一)
- 英国の医療とプライマリ・ケア (J. フライ, 小林登, 紀伊國献三)
- 全人的医療とホスピス (R. G. トワイクロス, B. M. マウント, 植村研一)
- 「臨床疫学」の目指すもの——米国の臨床疫学の第一人者・Dr. Fletcher夫妻を迎えて (R. フレッチャー, S. フレッチャー, 福井次矢)
- POSの発展をめざして (L. L. ウィード, 紀伊國献三, 森忠三, 片田範子)

2011年には、日野原先生を講師に迎えて、医学生対象のセミナー「この先生に会いたい!!」を開催しました。講演テーマは「医師になるための基本的な学生時代の生き方」。先生ご自身の貧しかった生い立ちから話は始まり、敬愛するウィリアム・オスラー博士の生涯や格言、医学以外の一般教養の重要性を力説されました。「皆さんはまだ医学生ですから、自分のことで精一杯かもしれません。でもいつの日か、誰かのために生きてほしい。病む人に対するArt of medicineを忘れないでほしい」。「これから皆さんが得るであろう資格や実力の多くは、自分の努力だけではなく、人から与えられるものなのです。謙遜の徳を大切にしてください」。あの時の参加者の皆さんは既に医師として活躍されていることと思いますが、これらのメッセージをきくと覚えておられるに違いありません。

実はその日、日野原先生は病み上がりでした。1週間前から発熱があり、インフルエンザの診断を受けて聖路加国際病院に入院していたそうです。「医師に絶対安静の忠告を受けたにもかかわらず、その間に2回の日帰り出張講演をこなし、週末には医学生と語り合えることを楽しみにしていた」と、当時の秘書・岸野めぐみさんが打ち明けてくれました。講演のスタート時はさすがに体調が優れない感じでしたが、医学生と話そううちにどんどん元気になっていくのが伝わってきました。講演後の懇親会では、百寿の前祝いとして医学生からの寄せ書きを手渡しました。突然のプレゼントに、日野原先生は両手を突き上げて「Go! Go! Go!」とサプライズ返しをされました。一瞬の沈黙の後、会場が爆笑の渦に包まれた瞬間が、昨日のことのように思い起こされます。

日野原先生のおかげで、今の「週刊医学界新聞」があります。これまで本当にありがとうございました。



本紙第1424号「これからのプライマリ・ヘルス・ケア」(H. T. マーラー, 紀伊國献三)



本紙第1479号「科学・哲学・医学」(武見太郎)



【写真左】本紙第2928号「この先生に会いたい!! 公開収録版 日野原重明先生に聞く」/【写真右】講演後の懇親会にて「Go! Go! Go!」

日本の医療を創った「対話(ダイアログ)」と「革新」の軌跡

日野原重明ダイアログ

「週刊医学界新聞」に掲載された日野原重明氏の講演・インタビュー・対談・座談会などから11本を厳選し書籍化。医学教育、プライマリ・ケア、POS、緩和医療など、医学界の発展は日野原氏の革新の精神とともにあった。

日野原重明

対話と革新の軌跡

医学書院

“健康と開発”の視点に貫かれた包括的教科書、日本語版が完成

新刊 グローバルヘルス

世界の健康と対処戦略の最新動向
Global Health 101, 3rd Edition

▶ グローバリゼーションの進展に伴って発生する地球上の「健康」に関する問題について、公衆衛生、疫学、医学、看護学、人類学、開発経済学、政治学、社会学などの複合的な学問領域であり、米国公衆衛生協会によってまとめられた「グローバルヘルス」の入門書。グローバルヘルスの重要な問題を「開発(development)」の視点から概観し、その経済的、社会的影響や対策を検討するための基本的知識を解説する。

監訳: 木原 正博 (京都大学グローバルヘルス学際融合ユニット・ユニット長 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野教授)
木原 雅子 (京都大学グローバルヘルス学際融合ユニット准教授 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野准教授)

定価: 本体9,200円+税
A4変 頁570 図3 2017年
ISBN978-4-89592-897-7

MEDSI メディカル・サイエンス・インターナショナル
113-0033 東京都文京区本郷1-28-36
TEL. (03) 5804-6051 http://www.medsi.co.jp
FAX. (03) 5804-6055 Eメール info@medsi.co.jp

新臨床内科学

阿部 正和, 日野原 重明, 本間 日臣, 岡部 治弥, 田崎 義昭, 高久 史磨 ● 編

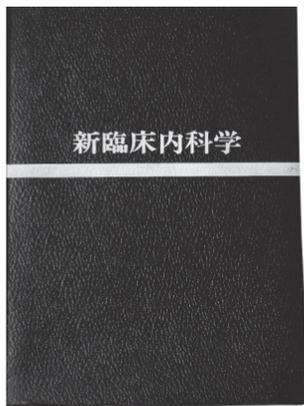
医学書院 1974年初版発行

日野原・阿部両氏の示唆を受け、『Current medical diagnosis and treatment』(McGraw-Hill)に着想を得て構想されたのが『新臨床内科学』である。

従来の内科学教科書は、高名な大学教授が教室員や関連病院の医師に声を掛けてまとめあげるのが通例であった。本書はその慣行を破り、全国から領域ごとに新進気鋭のエキスパートに執筆を依頼。総勢133人の執筆陣による、内科学のエッセンスが凝縮された一冊となった。1959年以降、『今日の治療指針』の編集を続けてきた日野原氏の人脈と慧眼の賜物とも言えるだろう。

『今日の治療指針』の姉妹編として位置付けられた本書は、他の分厚い内科学教科書とは異なり、「ベッドサイドですぐに役立つ内科学の知識」を簡潔にまとめた点に特徴がある(初版は

「ベッドサイド」内科学の型破りな教科書



B5判 866頁, 8500円)。また、総論部分において「新しい診療記録の方法」「水と電解質の障害」「眼底のみかた」などの章立てが並ぶのは、文字通り「新しい臨床内科学」を提唱しようという編者らの強い意図がくみ取れる(日野原氏は1955年、単著『水と電解質の臨床』を医学書院より出版。その序文においては、わが国の臨床医に水・電解質の基本的知識が不足している点を既に指摘している)。

初版は医学生・研修医を中心に高い評価をもって迎えられ、当時ほとんどの医学生は内科実習の際に本書を携帯していたという。早くも2年後(1976年)には医師国家試験への対応を強化した改訂版が出され、医学教科書の在り方にもひとつの方向性を示した。現在は第9版まで版を重ねている。

POS——医療と医学教育の革新のための新しいシステム

日野原 重明 ● 著

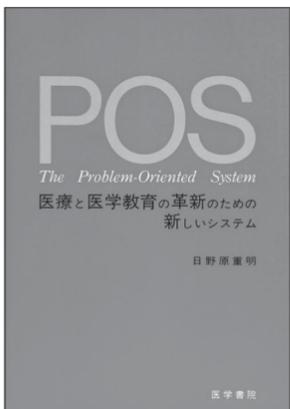
医学書院 1973年初版発行

L.L. ウィード(本年6月に逝去)がPOS(Problem Oriented System)を提唱し、1969年には著書『Medical Records, Medical Education and Patient Care』が出版された。

日野原氏はウィードの論文や著書に目を通してPOSのアイデアに共感したものの、実践の方法については当初懐疑的であったという。

一方米国では、心臓病学の大家であり医学教育に熱心であったJ.W. ハーストがPOSの普及活動を始めていた。旧知の間柄であるハーストのもとを訪れた日野原氏は、POSの導入が日常診療や医学教育を革新するとの結論に至り、1973年に本書を出版する。その序文においては、「私の今日までの、かなり長い内科臨床の経歴の終り近くになって、私の医療に対する考え方を、大きく転換させる動機づけになった」とまで述べている。なお、

半生をかけて普及に努めた「革新」のためのシステム



赤色の表紙は日野原氏の要望で、「革新」の意図が込められている。

ウィードを囲んでの「週刊医学界新聞」座談会(第1531号)において日野原氏は、ウィードのPOSにかかる熱烈な想いを使徒ヨハネに例えている。日野原氏もまた、関連書の出版やPOS研究会(後の「日本POS医療学会」)の発足など、POSの普及にかかる情熱は終生衰えることがなかった。

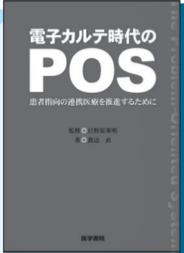
POSは、ともしればSOAPによる問題解決技法に焦点が当てられるが、その本質は「1患者-1カルテ」を基本とした全ての医療職の患者情報の共有である。電子カルテ導入で医師も看護師も記録に忙殺される今こそ、再読すべき書と言えよう。本書の精神は、『電子カルテ時代のPOS』(日野原重明監修・渡辺直著, 医学書院)に引き継がれている。

POS方式の電子カルテへの導入は医療者の医療姿勢を一変させる

電子カルテ時代のPOS 患者指向の連携医療を推進するために

電子カルテによるPOS実践は、多職種がとらえた患者の多面的な問題(プロブレム)の共有を容易にし、病気をもちた生活者としての患者を浮かび上がらせる。医療者の医療姿勢を一変させるPOS実践を電子カルテで行うには、何に気をつけ、どうすれば良いかを具体例をあげて解説。名著「POS」(日野原重明著)の赤本から、本書はPOSの今日的意義を明確に提示した第二の赤本。医師・看護師、コメディカルスタッフ必読書。

監修 日野原重明 著 渡辺直



B5 頁168 2012年 定価:本体2,000円+税 [ISBN978-4-260-01635-3]

医学書院

ナースに必要な診断の知識と技術

日野原 重明, 安部井 徹, 岡安 大仁, 本多 慶夫, 道場 信孝 ● 著

医学書院 1978年発行

今こそ看護教育においてフィジカルアセスメントは専門職として必須の知識・技術であるとされている。これは、問診・視診・触診・聴診・打診の技術を医師専用のものとせず、看護師がよりよいケアをする上で患者情報の一つとして活用するものと言える。こうした考え方をいち早く広めようとした先駆者も日野原氏であった。

1978年に発行された本書序文には、「本書が、恐らくは日本の看護界に、そしてまた、日本の医療界に大きな波紋を投げかける一石となることを予測し、その波紋を最も敏感に

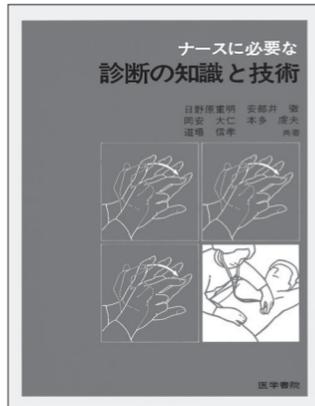
感じとられるナースの方々が、大いに動機づけられて新しいナーシングへの道を前進されることを希い、この書を出版するものである」と宣言している。本書が出版された後、日野原氏はその

考えを広めるためにセミナーを提案。全国各地を自ら講演して回ったという。ただし、日本の看護教育の中にそうした考えが根付くのに30年以上の歳月が必要とは思っていなかったのではないだろうか。

医師の専断事項であると思われていた「診断」を銘打ったナース向けの本を出すことに、出版社内でも企画の是非について厳しい議論があった。思い余った編集担当が日野原氏に相談に行ったところ、「法律はね、現実を追認するために後から付いて来るんですよ」と言ったというエピソードは、氏の革新性を物語っている。

本書は、『フィジカルアセスメント——ナースに必要な診断の知識と技術』と改題され、今でも多くの看護師・看護学生に愛読されている。

未来を先見し、看護・医療界に波紋を投じた一冊



日野原先生が選ぶ「医学生のためのベッドサイド・ライブラリー」

日野原先生のロールモデルであるW. オスラーは、「諸君の仕事のゆうに3分の1は、専門書以外の範疇に入るものである」として、よい医師になるためには、医学の実地教育だけではなく人文教育の修得も必要であると説いています。そして医学生に対し、就寝前の30分間は必ず本を読むように勧め、「医学生のためのベッドサイド・ライブラリー」を挙げました。

日野原先生もオスラーに倣い、ご自身のベッドサイド・ライブラリーを事あるごとに紹介しました。ここでは医学生向けに、「医学を志すものとして、基礎としてのリベラル・アーツが体得されるように」との意図で選んだ10冊を再掲します(初出:本紙第2384号)。

- 1) W. オスラー『平静の心』(日野原重明・仁木久恵訳, 医学書院)
- 2) 細川宏『病者・花(細川宏遺稿詩集)』(現代社)
- 3) A. M. リンドバーク『海からの贈物』(吉田健一訳, 新潮文庫)
- 4) V. E. フランクル『それでも人生にイエスと言う』(山田邦男・松田美佳訳, 春秋社)
- 5) S. クイン『マリー・キュリー』(田中京子訳, みすず書房)
- 6) E. フロム『愛するということ』(懸田克躬訳, 紀伊國屋書店)
- 7) 夏目漱石『思い出す事など』(岩波文庫)
- 8) E. H. エリクソン, 他『老年期——生き生きしたかわりあい』(朝長正徳・朝長梨枝子訳, みすず書房)
- 9) 神谷美恵子『生きがいについて』(みすず書房)
- 10) P. A. タマルティ『よき臨床医をめざして——全人的アプローチ』(日野原重明・塚本玲三訳, 医学書院)

本邦初! 関節リウマチの画像診断を解説した本格的テキスト

関節リウマチの画像診断

診断の基本から鑑別診断まで

- 編集: 杉本 英治 自治医科大学医学部放射線医学教授
- 神島 保 北海道大学大学院保健科学研究院医学生理学分野教授
- 定価: 本体7,200円+税
- B5 ● 頁368 ● 図108・写真693 ● 2017年 ● ISBN978-4-89592-894-6

生物学的製剤などにより治療分野での進歩を遂げている関節リウマチ(RA)の診療において、画像診断の有用性がクローズアップされている。本書では、従来の単純X線に加えて、RAの早期診断を可能にするMRIや超音波などの検査法、診断の基本から、外科治療も含めた進行期RAの診断までを解説。さらにRA新分類基準(ACR/EULAR2010)に準拠した鑑別診断を詳述。スコアリング法や定量的解析の可能性も紹介。放射線科医、リウマチ・膠原病内科医、整形外科医必読。総合内科医にも有用。



本邦初! 「股関節・骨盤」領域に特化した本格テキスト

股関節・骨盤の画像診断

- 編著: 川原 康弘 長崎労災病院放射線科部長
- 定価: 本体7,800円+税
- B5 ● 頁336 ● 図57・表40・写真573 ● 2017年 ● ISBN978-4-89592-879-3

関節領域の中でも特に股関節・骨盤領域に特化した画像診断のテキスト。モダリティ別の撮像法など画像診断の基本を解説した上で、日常診療でおさえるべき疾患、まれだが重要な疾患を厳選し、豊富な画像写真を交え詳述。MRI診断が重要な役割を占めるようになってきた整形外科診療の現状を踏まえた記述。放射線科、整形外科をはじめ、股関節・骨盤の画像診断に携わる医師・技師必携の書。



好評関連書

上肢の画像診断

● 著: 岡本 嘉一・橋川 薫 ● 定価: 本体7,000円+税

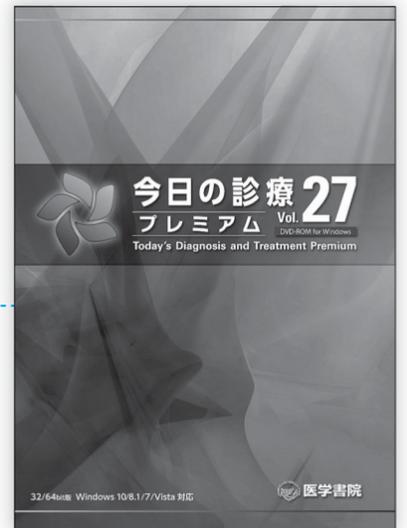
足の画像診断

● 著: 小橋由紋子 ● 定価: 本体7,400円+税

国内最大級の総合診療データベース、診療に関する最新情報を簡単に検索できます!

今日の診療 プレミアム Vol.27

監修 永田 啓
滋賀医科大学医療情報部 教授



DVD-ROM for Windows

医学書院発行の書籍15冊を収録、全文横断検索可能な国内最大級リファレンスデータベース(インターネット接続環境では電子ジャーナルサービス「MedicalFinder」でも検索可能)。Vol.27では、「今日の治療指針」「治療薬マニュアル」「臨床検査データブック」「今日の整形外科治療指針」「今日の精神疾患治療指針」の5冊を改訂。検索書籍リストのカスタマイズ機能を新規搭載。スマートフォンやタブレット端末でも利用可能な「Web閲覧権付」。さらにデータはPCにインストールできます。

今日の診療 ベーシック Vol.27

DVD-ROM for Windows

医学書院の書籍8冊を収録、Vol.27では、8冊のうち「今日の治療指針」「治療薬マニュアル」「臨床検査データブック」「今日の整形外科治療指針」の4冊を更新。検索書籍リストのカスタマイズ機能を新規搭載。

●DVD-ROM版 2017年 価格:本体59,000円+税 (JAN4580492610223)

●DVD-ROM版 2017年 価格:本体78,000円+税 (JAN4580492610209)

緩和ケアの必携書、待望の改訂

トワイクロス先生の 緩和ケア処方薬 薬効・薬理と薬の使い方 第2版

編集 R. Twycross・A. Wilcock・P. Howard
監訳 武田文和・鈴木 勉

原書は“Palliative Care Formulary 5th edition”(2014年)。ロバート・トワイクロス博士(オクスフォード大学緩和ケア学講座初代教授)の編纂による緩和ケア界の必携書。最新のエビデンスに基づいて改訂された。緩和ケア薬を網羅した薬剤情報集と基本知識(オピオイド効力換算比、終末期の薬の投与法、薬物間相互作用など)の二部構成。新章「かゆみの治療薬」なども追加された。



●A5 頁928 2017年 定価:本体5,500円+税 [ISBN978-4-260-03031-1]

「わかってくれる人」に、私はなりたい

死を前にした人に あなたは何かができますか?

小澤竹俊

看取りの現場では、答えることのできない問いを突き付けられる。「下の世話になるくらいなら、いっそ死にたい」「どうしてこんな目に合うの?」。そこでは説明も励ましも通用しない。私たちにできるのは、相手の話を聴き、支えを見つけること。言葉を反復し、次の言葉を待つこと。それは誠実に看取りと向き合ってきた在宅医がたどりついた、穏やかに看取るための方法。死を前にした人に、私たちにできることがある!



●A5 頁168 2017年 定価:本体2,000円+税 [ISBN978-4-260-03208-7]

2017年10月発行の医学雑誌特集テーマ一覧

冊子版および電子版等の年間購読料につきましては、医学書院ホームページをご覧ください。 医学書院発行

公衆衛生 11月号 Vol.81 No.11 1部定価: 本体2,400円+税	薬局・薬剤師の地域展開 コミュニティ・ファーマシー	臨床外科 増刊 Vol.72 No.11 特別定価: 本体8,200円+税	手術ステップごとに理解する 標準術式アトラス
medicina 10月号 Vol.54 No.11 1部定価: 本体2,600円+税	自信をもって対応する 虚血性心疾患	臨床婦人科産科 10月号 Vol.71 No.10 1部定価: 本体2,700円+税	最新! 婦人科がん薬物療法 —化学療法薬から分子標的治療薬・免疫療法薬まで
総合診療 10月号 Vol.27 No.10 1部定価: 本体2,500円+税	めまいがするんです! 特別付録Web動画付	臨床眼科 10月号 Vol.71 No.10 1部定価: 本体2,800円+税	第70回日本臨床眼科学会講演集(8)
糖尿病診療マスター 10月号 Vol.15 No.10 1部定価: 本体2,700円+税	臓器炎症からみた糖尿病 および糖尿病性合併症	臨床眼科 増刊 Vol.71 No.11 特別定価: 本体8,500円+税	眼科基本検査パーフェクトガイド —理論と実技のすべてがわかる
循環器ジャーナル (旧 呼吸と循環) 10月号 Vol.65 No.4 1部定価: 本体4,000円+税	ACSの診断と治療は どこまで進歩したのか	耳鼻咽喉科・頭頸部外科 10月号 Vol.89 No.11 1部定価: 本体2,700円+税	①明日から役立つ頭頸部領域の核医学—最新情報/ ②知っておきたい耳鼻咽喉科の在宅医療
胃と腸 10月号 Vol.52 No.11 1部定価: 本体3,200円+税	非特異性多発性小腸潰瘍症/ CEAS—遺伝子異常と類縁疾患	臨床泌尿器科 10月号 Vol.71 No.11 1部定価: 本体2,800円+税	透析療法のNew Concept —各種ガイドラインに基づく診療のポイント
Cancer Board Square 10月号 Vol.3 No.3 1部定価: 本体3,400円+税	最期の最後のがん診療/胃がん	総合リハビリテーション 10月号 Vol.45 No.10 1部定価: 本体2,300円+税	排尿ケアとリハビリテーション
BRAIN and NERVE 10月号 Vol.69 No.10 1部定価: 本体2,700円+税	成人てんかんをめぐる諸問題	理学療法ジャーナル 10月号 Vol.51 No.10 1部定価: 本体1,800円+税	半側空間無視
臨床外科 10月号 Vol.72 No.10 1部定価: 本体2,700円+税	Conversion Surgery —進行消化器がんのトータル治療戦略	臨床検査 11月号 Vol.61 No.11 1部定価: 本体2,200円+税	母子感染の検査診断
		病院 10月号 Vol.76 No.10 1部定価: 本体3,000円+税	医師の働き方改革



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 [WEBサイト] <http://www.igaku-shoin.co.jp>
[販売部] TEL: 03-3817-5650 FAX: 03-3815-7804 E-mail: sd@igaku-shoin.co.jp